金祝・銀祝を祝って　2017年7月2日

島のひかり ホームページアドレス
http://lifeaidgoto.jpn.cx/simanohikari/

発　行
カトリック浦頭教会
広報委員会
五島市平蔵町2716
TEL 0959㉓0072
印　刷・㈲才津印刷所

時の流れの中で

主任司祭　小瀬良　明

「島のひかり」の愛読の皆さん、初めまして。今度、浦頭教会に赴任した者です。よろしくお願いします。

信徒発見一五〇年祭も終り、新たな歩みを続けている長崎の教会群の一員です。浦頭教会は、歴史的に五島地区の中心的役割を果してきた信徒の共同体でありました。そして今、新しい時を迎え、教区シノドスが行なわれ、今後の教会の在り方が話し合われることになりました。

過去には想像できなかったことが今、そして将来起こることが考えられる地域社会の現状となって参りました。

ここの教会も、かつては信徒数が千名以上の共同体であったことが記録されています。地域の学校も校舎は大きいままだが、生徒数の減少で空き教室が増えていると伺っています。

子供たちの減少は、教会にとっても召命の減少に反映されることとなります。

こんな状況の中で赴任した私は、自問しています。私には何ができるのだろうか。転じて、何か善き道は見い出せないものだろうか。共同体として共に考え、歴史の一ページを生きて参りたいものです。

将来にやや不安を抱いている島に、ひかりが見えることを念じます。この季刊誌が、その一役を果してくれることを先祖の方々に祈り、一筆を執らせていただきました。

小瀬良明神父様　浦頭小教区着任

四月二十七日、岩崎神父様と入れ替わりで、小瀬良神父様が北松佐々教会よりおいで下さいました。

聞くところによると野下神父様の時代に、そのグループの中に小瀬良神父様もいらして、浦頭の黙想会で説教されたようです。それを覚えている人、もう忘れてしまっている人、様々ですが、信仰は一つ、神は一つ、神父様と共に浦頭小教区を盛り上げていかなければなりません。

神父様が替われば、一人ひとり顔が違うように、教会の仕事の分担も多少変わっていきますが、心を一つにして頑張りましょう。

経歴等

1947年12月12日　諫早市出生
諫早市立長田小学校卒業
長崎南山中・高卒業（長崎公教神学校）
福岡サン・スルピス大神学校卒業
（慶応大学文学部二部卒業）

1975年３月19日　叙階（浦上教会於）
浦上教会助任
浅子教会主任
褥崎教会主任
真手ノ浦教会主任
（上五島町教育委員長兼任）
紐差教会主任
滑石教会主任（滑石教会建立）
カトリックセンター事務局（事務局長）
佐々教会主任（佐々教会建立）
浦頭教会主任　　今日に至る

その他　福祉法人一粒の麦の会理事長

（指定障害者福祉事業所サクラ、就労継続支援Ｂ型事業所サクラＣＯ、指定特別相談支援事業所サクラ、グループホーム（３ヶ所）、放課後デイサービス事業所チェリー、小規模多機能型居住介護パスカの丘、サービス付高齢者向住宅パスカ、社員寮（神羊館）など）

岩崎神父様に感謝

四月二十三日、浦頭小教区で六年間、御指導下さいました岩崎神父様が諫早教会に転任となり、送別会が行なわれました。

神羊館のホールには、今までにない多くの信徒が参加し、盛大に行なわれました。

思い起こせば、浜泊の地区集会のあと、神父様と四名の役員と共に教会まで歩いて帰ったのですが、その時、地域ではペタンクという競技が盛んで、是非復活祭に教会主催でやりましょうとなり、即実行となりました。

その時の賞品も神父様に出して頂き、申し訳なく思ったものでした。

その後、奥浦小学校で数年前からナイターペタンク大会が盛大に行なわれていた事から、神父様も教会の役員とチームを組んで出場したのですが、百十チームの中で、見事優勝という成績を残しました。

他にもソフトボール、バレーボール、短距離走など素晴らしい活躍を見せていた神父様も、苦手な事が一つありました。

それは、司祭団マラソンなど長距離走が苦手で、いつも笑顔の神父様も暗い顔をしていました。

ミサの中では説教の時、何か面白いことを言って笑わせたり、子供達を平和学習、侍者を旅行に連れて行ったり、子供から老人に至るまで、大変愛され親しまれた神父様でした。

四月二十七日、とうとうお別れの日が来ました。十一時のフェリーさくらでお見送り。たくさんの人達が集まり、船が見えなくなるまで手を振っていた。涙しながら。岩崎神父様、ありがとうございました。

沢山の出会いに感謝

川口広平

六月十七・十八日、浦頭青年会を中心とするメンバー十人で巡礼旅行に行ってきました。

今回は、大司教区ミニバレー大会参加をかねて、長崎・諫早地区への旅行となりました。

初日は、長崎市内をさるきながら中華を堪能。めがね橋で記念撮影、ジブリの世界に酔いしれるなど、青春まっさかりの内容でした。夜は諫早市内に移り岩崎神父様、水主町青年会と夕食会を行いました。水主町青年会とは、昨年に引き続き2回目の夕食会ということもあり、おいしいごはんとお酒をいただきながら、2次会まで楽しく過ごすことができました。

翌朝は前日の二日酔いにも負けず、諫早教会の御ミサにあずかり、お祈りを奉げてきました。ミサの終わりに神父様から紹介にあずかり、地元の信者さんからの温かい拍手とたくさんの声を掛けていただき、嬉しく思いました。

そして、午後からのミニバレー大会には神父様方も合わせて約四十五名の参加があり、各教会をミックスしてのチーム対抗戦が行われました。私達は教会対抗と思って練習していたこともあり、少し残念な気持ちもありましたが、試合が始まってしまうと浦頭メンバーが元気なこと！元気なこと！接戦になればなるほどプレーにも熱が入り、終始賑やかな試合展開となりました。また、大会最後の挨拶の中で「これだけの青年が集まれば長崎大司教区は捨てたもんじゃない」と代表の神父様から激励があり、勇気をいただきました。

今回の巡礼旅行は、多くの教会を訪ねることはできませんでしたが、県内各地区の青年会と交流できたことが私達にとって大きな刺激となり、未来へつながる大切な旅行となりました。近年、少子高齢化で町や教会等の存続が危惧されておりますが、長崎で出会った青年の皆さんとこれからも交流を深め、青年のパワーで長崎大司教区に少しでも光をもたらすことができればと思います。

最後に、岩崎神父様をはじめ水主町青年会の皆さんのご協力のおかげで、感謝の内に巡礼旅行を終えることができました。ありがとうございました。また来年、どこに行こうか考えるだけで楽しみです。

金祝・銀祝を祝う

お恵みと支えの五十年

片岡久司神父様

五十年前、司祭に叙階された時、その大きなお恵みを前にして実感したことは、それが神と支援を惜しまれなかった多くの方々からの、ほんとに大きないただきものだということだったと思います。

そこから始まった司祭生活も五十年を経て、司祭叙階金祝を迎えるという、私にとってまた大きなお恵みをいただきました。この五十年という司祭生活は神の力強いお恵みと皆様の物的、霊的支援によってあり得たいただきものと言わなければなりません。そして今、私の心情は五十年前の叙階の時と同様、またそれ以上の深い感謝であります。

五十年の生活を振り返ってみますと、十の小教区で働かせていただきました。それぞれの小教区での神のみ摂理の思い出がありますが、中でも司牧年数の一番長かった、そして堂崎、半泊、宮原と巡回教会の多かった浦頭小教区の印象が最も強いように思います。

私が浦頭教会に赴任した時は、堂崎小教区から浦頭小教区に変更されてから、やがて小教区新設二十周年を迎えようとする頃でした。そこには、新しい小教区のすばらしい発展の兆しが見えるようでした。それは、信徒達の明るい元気な自信のある表情と使徒職活動、評議会活動への積極的参加に表われ、教会全体に活力を与えていたようです。

全てを神に感謝し、この五十年、種々のあり方で支えて下さった皆々様の上に、神の慈しみに満ちた祝福を祈りながら、日々を送りたいと思っています。

司祭叙階五十周年を迎えて

﨑濵宏美神父様

五十年前の司祭は、ミサ聖祭を始めるにあたっては、祭壇中央の下に進み、そこで片膝を床につけるまで折って表敬した後、おもむろに「イン　ノミネ　パートゥリス・・・。と唱えながら十字を切った後、イントロイボ　アドゥアルタレ　デーイ」とラテン語でお祈りを始めなければなりませんでした。ところが、それから一年後には第二ヴァチカン公会議の典礼改革に基づき「各国の母国語」でミサができるようになり、ラテン語は使われなくなりました。五十年前を思い出すと、いろんなことが変わってきていると実感できます。

当時は、今の福江小教区と浦頭小教区は松下佐吉神父様がお一人で司牧なさっており、私の初ミサは福江教会でさせていただきました。ミサが終わると「早くこっちへ来なさい」と言われてついて行くと、司祭館の炊事場の入り口を入った土間でした。そこに七輪が置いてあり、二人でそれを挟んで座り、イワシを炭火で焼きながらビールをいただいたことを思い出します。「司祭叙階ぐらいで大そうな祝いはせん方が良かと。祝いをしたらろくな神父にはならん。」と持論を話しておられました。今でもしっかり覚えているということは、その通りだと納得していたからでしょう。

自己に厳しく生き、常に向学心に溢れておられた松下神父様の司祭としてのお姿は、近付きがたい感じもしますが、司祭のあるべき姿として深く心に刻んでおきたいことの一つだと思っております。　感謝！

司祭叙階二十五周年を迎えて

岩崎晋吾神父様

一九九二年三月、島本大司教司式のもと司祭叙階を受け、二十五年目を迎えました。叙階を受けたあの日の事を、今も鮮明に覚えています。喜びや感動のようなものは、あまりありませんでした。それより、これからの司祭職の歩みにおいての様々な体験が、自分の喜びや感動を与えてくれるものだと、そちらの希望の方が大きかったように思えます。

そして、それは二十五年を振り返ってみて現実となりました。福江、大浦、滑石、フィリピン浦上、土井ノ浦、水主町、そして浦頭の八つの場所で司牧させていただき、二十五年を迎えて、司祭に叙階されたあの日より、司祭として生きてきたことの方が喜びとなった事を、感謝したいと思っています。

先日、浦頭教会において金祝、銀祝のお祝いをしていただきました。﨑濵神父様や片岡神父様のお話を聞きながら、金と銀の差を感じました。それは僅差ではなく、大きな開きがあるということです。多くの事を積み重ねて来られ、成熟した人生と満たされた司祭職のお話を聞いて、羨ましくもあり、自分もこれからだという希望にもなりました。

浦頭小教区での六年間、教会内外で学んだこと、経験したことを糧として、次の節目に向かって歩みます。二年後、浦頭教会も節目の小教区設立五十周年を迎えますが、こちらで益々の発展をお祈りしております。

また、美味しい魚を食べに行きます。その時は、よろしくお願いします。それでは、皆さんお元気で。

全てに感謝して

岩崎晋吾神父様

六年間の浦頭小教区の司牧を終えて、今回、諫早小教区へ赴任することとなりました。この在任中は、小教区や地域の皆様より多大な物的、霊的な支援をいただき、心より感謝申し上げます。また、移動の際には数多くの志とお見送りをいただき、有難うございました。大変失礼ですが、この場をお借りして感謝を申し上げます。

諫早に来て二ヵ月となります。環境は大きく変わりましたが、同じ信仰を持つこちらの信徒の方も、良く協力して下さり助かっています。

これからも、浦頭共同体の結束の固い素晴らしい面を生かして、成長して行かれることをこちらでお祈りしております。六年間の全てに感謝しております。有難うございました。

中村長八神父様の生涯を追って

島のひかりでは、ブラジルで献身的に布教活動に携わり、列福運動が進む浦頭出身の中村神父様の生涯を、数回に渡って連載していきます。

※列福の意味…カトリック教会において、死後の徳と聖性を認められた信者に与えられる称号を福者といい、その称号を受ける事を列福という。

ドミンゴス　中村長八神父は一八六五年八月二日、浦頭の中入地区の緑濃い奥まった地に生まれた。

その地の今…（梅雨の時）

小道の両側に漏れながらたたずむ二本のイヌマキの木がその細長い葉先から滴を優しく落としていく。この二本の木は、一九二三年三月、当時、福音活動をしていた奄美大島から携えて来た幼苗を、ふる里の人達と別れを惜しみながら記念の植樹をしたと伝えられている。この当時の状況からして〝今度会う時は天国で。〟という固い決意の元で植樹を行なわれたであろう事を想像させる。

中村神父は、その多くが長崎の外海地区から安住の地を求めて同島に到着した、キリシタンの末裔（まつえい）にあたる。彼は、初五郎・ツグエの長男として生まれた。

長八少年が三才の時、船乗りだった彼の父は航海の途中、嵐に巻き込まれ遭難し亡くなった。彼の母ツグエは再婚したが、長八少年が十五才になった時、母と姉が次々に亡くなるという悲劇に見舞われ、孤児になるという運命が彼を待っていた。その時点で、叔父のキュウゾウが唯一の親族となった。同年、彼の優れた知性と敬虔（けいけん）さは、当時この地を指導していたフランス人神父の目にとまり、長崎神学校の入学につながって行く。

映画『沈黙』を見て

映画館で、この映画のCMが流れ始めた頃から「必ず見よう」と思っていた映画でした。五島でも上映され、多くの方が見られた事と思います。今回は教会での上映ではないので様子は書けませんが、一個人の感想として読んで頂ければと思います。

この映画は、全編通してかなり残虐なシーンがあり、目を背け、涙が止まりませんでした。それも長々と苦しめてから殺す事。冒頭の雲仙も、すぐに地獄に落とすのではなく、熱いお湯をかけながら苦しめたり、海の中に十字にはりつけられて、打ち寄せる波に苦しみながら、長い人は三日間かけて亡くなったり、本当に酷いものでした。ただ、このように殉教した人もいれば棄教した人もいて、主役のロドリゴ神父も最後は棄教します。実は、私は二回この映画を見ていて、一回目はその悲惨なシーンだけが心に残っていましたが、二回目は少し冷静に見ながら「果たして神様は、こんな悲惨な死に方を望んでいたんだろうか？」と思うようになってきました。ロドリゴ神父も、ギリギリの心理状態の中で神様の声を聞きます。その声を聞き、踏絵を踏み棄教します。そして、彼はずっと踏絵を踏み続けます。ただ、ロドリゴ神父は自分の命を守りたかったのではなく、どのような形であれ、神様は自分と共にいて下さるとあの神様の声を聞いて以来、信じていたのかもしれません。現に今、私たちがカトリック信者としていられるのも、この時、生き延びた方がいたお陰です。

きっと神様は、殉教した人も棄教した人も変わらず愛してくれると思います。ただ、そこに神様が一緒にいて下さるという事を感じながら、ひとつひとつの自分の道を歩んで行けたらと思います。

―私は沈黙していたのではない、一緒に苦しんでいたのだ―

先人からの信仰 今もなお脈々と

下五島地区小教区恒例の井持浦ルルド祭が、五月十四日に行なわれました。

聖母像を先頭に、各小教区毎に分かれての行列が始まり、浦頭の信徒も聖歌隊や聖母の担ぎ手等、役割担当を行い、五月晴れの天候にも恵まれ、また母の日とも重なり家族で訪れたルルド祭の人々にとって、最良の日であったようです。

御ミサの終りに浦頭教会に新しく着任された、小瀬良明神父様を、参加した信徒に紹介しました。三井楽の大瀬良神父様と大、小の揃い踏みになりましたとか、話題と恵みに満ちたルルド祭でした。

慈恵院・賑わいの丘 夏祭り

五島に夏の到来を知らせてくれる、慈恵院恒例の夕市が七月十六日行なわれた。梅雨も終わりを告げるように晴天に恵まれ、絶好の日和の中、今年は二百五十名と大勢のお客様が訪れた。

慈恵院の子供達、職員の人達、ボランティアスタッフの協力により、バーベキュー類の食材やたこ焼き、かき氷等、匂い立つ香りが来客の鼻を刺激し、サイフの紐をゆるめていく。

修道院の前の広場では、くじ引きによる賞品提供。よもや・当たれば〝超ラッキー〟とよぎった賞品と、自分の名前がクロス・オーバーして司会者の口から出た瞬間、満面の笑顔があふれた。最後は、みんなに配られた風せんを膨らませて、暮れ行く夕空に解き放った。

〝ビュー。ヒュー…〟

おたより

本年も梅雨の時期になりました。むし暑さの中、みな様広報の為、精出しておられる事と推察いたします。長年「島のひかり」をお送りいただきありがとうございました。

八王子市　純心聖母会
Sr 浜口　昌子

〝ありがとう〟

この度も、多くの方々から御芳志等の協力を頂きました。

暑い中、お仕事やそれぞれのお務め頑張っているのを、神様はちゃんと視ていて下さる。

心豊かにし、夏を乗り越えたいものです。

八王子市　純心聖母会
Sr浜口　昌子　様
神戸市　峯下　喜美代　様
佐世保市　松田　トミ子　様
長崎市　﨑濵　宏美　神父様

秘跡

《帰天》

マリア・マグダレナ
山口　ヨモ　宮原
四月二十六日

フランシスコ
木口　敏雄　浦頭
六月二日

テレジア
宮崎　サナエ　宮原
七月五日

お詫び

前号で役員の名前を間違っていました。訂正いたします。

シメオン・アンナ友の会
書記・会計　誤　赤尾スミエ
　　正　赤尾スエミ

信仰教育委員会　委員
小学校　誤　浜崎　毅
　　正　木口　北斗
中学校　誤　入口　庄二
　　正　浜崎　毅

ふるさとだより

バラモンキング 2017

六月十一日、五島市のイベントとして定着しているバラモンキング（五島長崎国際トライアスロン大会）が行われました。

当日は梅雨入りの為に予報では雨でありましたが、明け方には止み、日射しが射し込む湿度が高いコンディションの中、多くの選手、大会関係者、ボランティアの方々が頑張られました。

何年もボランティアをしていると名前までは分かりませんが、記憶にある顔の選手が多く通過されて行きます。「ファイト」と声を掛けると「ありがとうございます」と返されます。皆様、お疲れ様でした。

大蔵川遊び体験

…大人も童心に帰って…

七月八日、佐世保地区から民生委員役員を迎え、奥浦小学校の子供達と浦頭の小川で魚釣りや、生物の観察会を行った。五島市の民生委員や子供教室に協力するサポートを含め、釣り糸を垂れたり、カゴですくったりして、小魚の捕獲にチャレンジ。

数年前に放流した準絶滅危惧種のアブラボテもしっかり次の世代に交替した事を確認したり、ウナギにバケツから逃げられ、子供達が捕まえるのに悪戦苦闘。そのヌメヌメ感を実感。大人達は滑稽な安来節を想像、笑いを誘っていた。

優勝 奥中男子バレー部

五月二十日（日）福江中学校体育館で、中総体バレーボール競技が行われました。

男女とも一試目、どちらも沢山の応援で選手たちを見守る。男子は一セットを落としたものの、二セット目は翁頭中に傾いた流れを全員バレーで大逆転。三セット目は、そのままの流れで勝利。優勝を決めた。女子は一回戦、三井楽に勝利。二回戦は富江中に敗れましたが、子供たちの成長を見ることが出来ました。

編集後記

六月十五日早朝「共謀罪」が強行採決され、「特定秘密法」と揃い踏みしました。

八十年近く前、現人神天皇＝偶像崇拝を強要され、典礼も改変されました。小さきテレジアを日本に紹介されたシンベン・ブスケ神父は獄死され、横浜教区長戸田帯刀神父は敗戦直後、射殺され迷宮入りしました。当時は、監視と密告により民は分断され、教会も例外ではなく、多くの関係者が逮捕されました。この弾圧が公に語られることが少なかったのは、当時の関係者の存命を慮ったからでもあるでしょう。

内心の自由は信仰の自由そのもの、又、平和なくして信仰の自由はありません。映画「沈黙」の中の世界は、過去の話ではないかも知れません。昨日と今日は同じような顔であっても、全く変わってしまったのかも知れません。意識して歴史に学びたいものです。